

11月14日から16日の3日間、トルコより学生たちがやってきて、桜修館で日本文化の体験や、授業、ディスカッションなどを行いました。

4年生がバディとなり、お互い第一言語でない英語を使いながら、上手にコミュニケーションをとって、彼らの桜修館での生活のサポートをしました。

生徒大会で、全校生徒の前でトルコの方がスピーチをしたり、かるた体験で、日本文化部かるた班の生徒と交流したりと、4年生だけでなく、多くの桜修館生にとって良い経験になったと思うので、共有したいと思います。

## 桜修館での生活



1日目はトルコの学生を出迎えたのちに2時間目の時間にウェルカムパーティーを行い、親睦を深めました。その後は一緒に授業を受け、放課後には部活動見学と茶道体験を行いました。2日目は、トルコ学生に書道、折り紙、カルタなどの日本文化を体験してもらいました。初めて触れる日本文化に驚きながら、とても楽しんでいる様子でした。クラスメイトたちとも少しずつ打ち解けていき、英語で会話を楽しむ様子が見られました。3,4時間目の生徒大会では、堂々とした挨拶を全校生徒の前でしてくれました。3日目は、トルコ大使の方がいらして、トルコの文化や歴史、日本との関係についてスピーチをしてくださりました。内容もとても興味深く、日本の生徒からも、トルコの生徒からも、沢山の質問が出てきました。また、放課後にはフェアウェルパーティーが行われ、トルコ人と日本人の生徒が、最後のひと時を、別れを惜しみながらも楽しみました。ウェルカムパーティーや生徒大会の準備を、根気強く、熱心に行ってくれた、4年中央委員会に深い敬意を称します。

## 感想

今回の交流は、我々にとって、とても貴重な経験になったと思います。英語を母国語とする人々と、そうでない人と間の英語でのコミュニケーションと、お互い別の言語を話す人々の共通の手段としての英語でのコミュニケーションでは、後者の方がより我々の英語でのコミュニケーション能力が試される状況だからです。

前者のシチュエーションは1学期、オーストラリアから留学生が訪れた際に経験しました。多少の意思疎通の難しさはあれども、留学生たちは我々の伝えたいことを一生懸命理解しようとしてくれたり、会話の中で我々の分からない単語が出てきたときには、より易しい英語に変換して言い直してくれたり、円滑にコミュニケーションをとるために、より英語に精通した留学生たちが工夫をしてくれていたように感じます。いわば、オーストラリアの留学生たちとの経験は英語学習で言うところの「インプット」にあたる部分が多かったのではないのでしょうか。実際に英語圏に住む人々が使う生きた表現や、日常的に使う英単語などを、彼らとの会話の些細な部分から吸収した人は多いと思います。そして今回の経験は「アウトプット」にあたると思います。英語の知識やレベルに多少の個人差はあれども、お互いのどちらも、「絶対的な英語の能力で会話をリードする」という立場ではなかったと思います。ここで、「英語を使って、相手に一番分かりやすく、シンプルな方法で伝えたいことを伝える力」が問われたのではないのでしょうか。グローバル化が進む社会で、英語は、「英語圏の人々と話すための手段」としてだけでなく、「そうでない人々とコミュニケーションを図るための手段」としても大事にされることは誰の目にも明らかでしょう。それを踏まえた上で、今回の経験は間違いなく15期生にとって素晴らしい経験となったと思います。